高校野球とメディア
－鹿児島県立大島高等学校の事例に着目して－

積　風我

長く高校野球は国民的な人気を博し、甲子園は全国的な注目を集める球児たちの夢舞台としてメディアの報道も熱を帯びるものとなっている。この論文は高校野球がメディアによってどのように取り上げられ、どのような影響を受けるかを横断的に調査するものであり、特に鹿児島県立大島高校野球部の事例に着目してその関わりを明らかにすることを目的としたものである。日本で国民的スポーツとなり、既存研究知して甲子園を中心に広範な人気を博している高校野球の観戦動機や報道方法に関する先行研究を引用しており、これらの研究は主にメディア側の視点から報道手法やその特徴を明らかにしている。

本研究では鹿児島県立大島高校野球部が 2022 年の春の甲子園に出場したことを題材とする。甲子園出場を決めたのちに大島高校野球部は「島から甲子園」や絶対的エースの存在などといった「物語」と共に注目され、数多くのメディアの報道がなされた。

本研究ではインタビューを中心とした質的な調査を行なった。大島高校野球部は、甲子園出場前はそれほどメディアの注目を集めることはなかったものの、甲子園出場後はメディア露出が大きく増加した。当高校野球部におけるメディア介入の影響や、報道をしたメディア側の報道意図などを通して高校生スポーツとメディアの関わり方の一例を明らかにしたものである。

本研究では、2023 年 8 月から 12 月にかけて大島高校野球部の部員、元監督、メディア関係者など 15 名にインタビューを実施した。インタビューでは、部員たちがメディアの介入に対して感じたプラスとマイナスの影響についての語りや、監督、メディア側の語りを得ることができた。プラス側は「メディアの注目を受けることで周りの目を意識し、より良い行動を取るようになった」というような語り、マイナス側は注目を浴びることによる弊害をそれぞれの主な影響として挙げることができた。監督は、メディアが入ることで選手への悪影響が生じないよう選手たちの生活にメディアが関わることを制限したり、信頼のおける媒体や個人にのみ密着などの形態を許可したりすることで選手たちを悪影響から守り、選手たちが真剣に野球に向き合えるような環境を保持し続けた。密着するメディアは大島高校野球部と関係性を構築しなんらかの形で部に対する助力を目的とした報道行為を行っていた。一連の報道行為は一過性のメディア・イベントのような形ではなく継続的なものとして大島高校の報道に関わり、その根底には大島高校の力になりたいという思いがあった。それらの熱意や誠意が大島高校へ継続的な接触を可能にし、幾度にもわたる報道がなされたと考えることができる。高校野球とメディアとの関わりがどのように選手や組織に影響を与えるかを明らかにすることで、この研究が近年加速する「高校野球とメディアの関わり方」の議論を進めていく一助となれば幸いである。

（指導教員　照山　絢子）